

講義科目名称	英語コミュニケーション研究 I	副題	Introduction to Meaning in Language
英文科目名称	English Communication Studies I		

開講期間	配当年	単位数	科目必選区分
前期	1・2	2単位	必修選択
担当教員			
細井 洋伸			

英語コミュニケーション	講義
添付ファイル	

授業種類	実務経験のある教員等による授業科目 <input checked="" type="checkbox"/> 実務経験のある教員による授業科目 <input type="checkbox"/> 実務家を招へいして実施する授業科目 実務経験・授業での活用、招へいする実務家等 授業で使用する言語 <input type="checkbox"/> 日本語 <input checked="" type="checkbox"/> 英語 <input type="checkbox"/> その他 アクティブラーニング <input checked="" type="checkbox"/> アクティブラーニング要素を取り入れている
授業の内容 (概要)	英語の意味に関する文法事項について「形式意味論」、「認知意味論」の基本的概念を参照しながら考えていく。授業形式は、反転授業の形式を取り、自宅で予習してきた新たな学習内容を、課題シートなども利用しながら、受講者相互で議論を行ったり、教員を含めた議論を行うなど、 <b>双方向あるいは多方向に行われる議論を通して内容を深く理解していく</b> 。さらに、受講者のこれまでの自分の英語学習あるいは教育現場での経験も振り返りながら、学習者としてどのようなトピックが理解・習得が難しいかを受講者相互で議論を行い、その後教員を含めて議論を行っていく。(上記「授業種類」に記載されているように、この授業は「実務家教員」による授業である。)
授業の目的	このコースは、英語でのコミュニケーションに関する研究の基礎となる意味に関して、その基礎について、議論を通して深く理解する。さらに、自分の英語学習あるいは教育現場での経験も振り返りながら、英語学習者にとって英語の意味に関する文法事項のどのような点が理解が難しいのか、それはどうしてかを議論して、その文法事項についての理解を深める。具体的には、「形式意味論」、「認知意味論」の基本的概念の観点から意味について考えていく。あわせて、これまでの理論的な考え方について考察し、課題を見つけ出す力を養う。国際コミュニケーション研究科の定めるDP1とDP3の達成に関与している。
到達目標	「形式意味論」、「認知意味論」の基本的概念を習得することにより、コミュニケーションで使われる英語の表現についての理解を深めることができ、より正確に、しかも適切に英語の表現を使うことができるようになる。また、受講者相互の議論や教員も含めた議論を通して、これまでの理論的な考え方について考察をし、課題を見つけ出す力をつける。
授業計画	<p>第1回 <b>イントロダクション</b> コースの概要を説明し、このコースで扱うトピックに関係することで、これまでの自分の英語学習あるいは教育現場での経験も振り返りながら、学習者としてどのようなトピックが理解・習得が難しいかを受講者相互で、また教員も含めて議論していく。(実務家教員による授業、双方向または多方向に行われる討論を伴う授業)</p> <p>第2回 <b>Ch1 Studying meaning</b> 私達が「意味」と言う時に、どのようなことを言っているのかについて、また、そもそも「意味」とは何なのかについて、受講者相互で議論し、その後教員を含めて議論をする。(実務家教員による授業、双方向または多方向に行われる討論を伴う授業)</p> <p>第3回 <b>Ch2 Adjective meanings</b> 形容詞 (Adjective) と一言でいっても、そこには意味的に様々なタイプの形容詞がある。授業では、異なるタイプの「形容詞」の意味の違い、特徴について、まずは学生相互で議論し、その後教員を含めて議論をする。あわせて、英語と日本語の各グループの特徴が異なることにより、英語学習者にどのような影響が出てくるかも議論していく。(実務家教員による授業、双方向または多方向に行われる討論を伴う授業)</p> <p>第4回 <b>Ch 3 Noun Vocabulary (Categorization, Hyponymy)</b> 「名詞」(Noun)の意味について、認知言語学でいう「カテゴリー化」(Categorization)の概念から考えていく。「名詞」の意味のカテゴリー化は私達が思っている以上に難しい。どのような点が難しいか、さらに認知言語学のカテゴリー化が私達の英語学習とどのように関係するかを、学生相互で議論し、その後教員を含めて議論をする。(実務家教員による授業、双方向または多方向に行われる討論を伴う授業)</p> <p>第5回 <b>Ch 3 Noun Vocabulary (Countable Nouns vs. Uncountable Nouns)</b> 「名詞」(Noun)の中でも特に「可算」(Countable)、「不可算」(Uncountable)名詞に焦点を当てて議論していく。英語の「不可算名詞」にも様々な種類の不可算名詞がある。授業では受講者相互で、英語にはどのような不可算名詞があり、不可算名詞全体に共通する特徴はあるのかを議論し、その後教員を含めて議論をする。また、英語学習者にはどのようなタイプの不可算名詞が特に習得が難しいのかを議論していく。(実務家教員による授業、双方向または多方向に行われる討論を伴う授業)</p> <p>第6回 <b>Ch 4 Verbs and situations: Vender and Kindaichi</b> 「動詞」(Verb)の意味を、他動性やアスペクトの観点から分析していく。「動詞のアスペクト」については、英語の動詞に「~ing」をつけた時に、また日本語の動詞には「~ている」をつけた時に、どのようにグループに分かれ、それぞれのグループにどのような特徴があるのかを、学生相互で議論し、その後教員を含めて議論をする。あわせて、英語と日本語の各グループの特徴が異なることにより、英語学習者にどのような影響が出てくるかも議論していく。(実務家教員による授業、双方向または多方向に行われる討論を伴う授業)</p> <p>第7回 <b>Ch 4 Verbs and situations: Vender and Kindaichi</b> 第6回の授業で行った、特に英語の動詞の分類についてさらに深く掘り下げていく。受講者相互で動詞を区別する特徴は何かについて議論していく、その後教員を含めて議論をする。(実務家教員による授業、双方向または多方向に行われる討論を伴う授業)</p> <p>第8回 <b>Ch 5 Figurative Language</b> この授業では、特に「Figurative Language」(比喩表現)の中でも特に「Metgaphor」(メタファー)、「Metonymy」(メトニミー)に焦点を当てて議論していく。「Metaphor」、「Metonymy」の特徴を受講者相互の議論、また教員を含めた議論を通して理解していく。その後、事前に新聞、小説などから探してきている「Metgaphor」、「Metonymy」と思われる表現についてテキストの内容に照らし合わせ、それらが「Metgaphor」、「Metonymy」にあたるかどうか、またテキストに書かれている特徴を持っているかどうかを議論していく。(実務家教員による授業、双方向または多方向に行われる討論を伴う授業)</p> <p>目とに <b>Ch 6 Tense and Aspect</b> 英語の「Tense」(時制)と「Aspect」(アスペクト)の特徴を確認した後、教員からの課題をもとに、日本語の「Tense」と「Aspect」が英語とどのように異なるのか、またそれが英語学習者にどのような影響を及ぼすのかを、受講者相互で議論し、その後教員を含めて議論をする。(実務家教員による授業、双方向または多方向に行われる討論を伴う授業)</p> <p>第10回 <b>Ch 7 Modality, scope and Quantification</b> この授業では、特に「Modality」(モダリティ)に焦点を当てる。「Modality」にはどのような種類があるのか、その意味についてどのような分析方法があるのか、実際の例にそのような分析がどのように、どこまで応用できるのか学生相互で議論し、その後教員を含めて議論をする。(実務家教員による授業、双方向または多方向に行われる討論を伴う授業)</p> <p>第11回 <b>Ch 8 Pragmatics: Presupposition</b> 話し手は発話をする際、発話以前に事実だと想定していることがあり、そのような情報に基づいて私達のコミュニケーションは成り立っている。そのような presupposition (前提)の種類、特徴について、また、実際の会話でそのような特徴がどこまで当てはまっているのか、どんな問題が生じるのかについて、学生相互で議論し、その後教員を含めて議論をする。(実務家教員による授業、双方向または多方向に行われる討論を伴う授業)</p> <p>第12回 <b>Ch 8 Pragmatics: Grice's Cooperative Principle and the Conversational Maxims</b> 私達がコミュニケーションを行う時に暗黙のうちに従っていると言われている Grice's Cooperative Principle (協調の原則)と the Conversational Maxims (会話の格率)の種類、特徴を確認について、また、実際の私達のコミュニケーションの中でどのように Conversational Implicature (会話的含意)が使われているか、英語と日本の間に何か違いはあるのかを、学生相互で議論し、その後教員を含めて議論をする。(実務家教員による授業、双方向または多方向に行われる討論を伴う授業)</p> <p>第13回 <b>Ch 8 Pragmatics: Conversational Implicature</b> 私達の会話は、文字通りの意味以外に、表面には出てこない含意を持ちうる。そのような Conversational Implicature (会話的含意)の特徴、様々な種類について、また実際の私達のコミュニケーションの中で、どのように Conversational Implicature が使用されているのか、英語と日本の間に何か違いはあるのかについて、学生相互で議論し、その後教員を含めて議論をする。(実務家教員による授業、双方向または多方向に行われる討論を伴う授業)</p>

	<p>第14回 Ch 8 Pragmatics: Speech Act</p> <p>言葉は、情報伝えるだけでなく、行為を行うこともできる。そのような Speech Act (発話行為) とはどのような特徴があるのか、また英語のコミュニケーションにおけるSpeech Act と日本語のコミュニケーションにおけるSpeech Actの間にどのような違いがあるのかについて、学生相互で議論し、その後教員を含めて議論をする。(実務家教員による授業、双方向または多方向に行われる討論を伴う授業)</p> <p>第15回 レポートの発表</p> <p>授業でやったことやったことで、特に関心があることについてレポートにまとめてもらい、それを発表してもらおう。また、その内容について、受講者同志や教員を含めて授業で議論していく。(実務家教員による授業、双方向または多方向に行われる討論を伴う授業)</p>
テキスト	<i>An Introduction to English Semantics and Pragmatics</i> . (Patrick Griffiths) Edinburgh University Press.
テキスト購入方法	授業中に指示する。
参考文献	授業中に指示する。
成績評価の方法	プレゼンテーション50%、学期末レポート50%
教員への連絡方法	授業の前後の時間を利用する。
履修上の注意	英語で授業を行う。
授業外学修情報 (予習復習)	<p>事前学習：テキストの予定箇所、参考文献について、事前にしっかり読み込んでおく。</p> <p>事後学習：授業で学んだことを復習し、理解を深める。</p> <p>1学期の授業外学修時間：合計30時間（1回の授業にあたり合計約2時間の予習・復習）</p>
学生へのメッセージ	毎時間、テキストで事前に指示されたところを読み込んでおく。